

令和元年9月13日現在

機関番号：34506

研究種目：基盤研究(B)（海外学術調査）

研究期間：2015～2018

課題番号：15H05173

研究課題名（和文）多文化社会における"コミュニティ"活動とメディア戦略に関する実践的研究

研究課題名（英文）An action research on "community" activities and media strategies in multicultural societies

研究代表者

西川 麦子 (Nishikawa, Mugiko)

甲南大学・文学部・教授

研究者番号：20251910

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,800,000円

研究成果の概要（和文）：多様な人々が集まり移動する多文化社会の“コミュニティ”活動において、住民が作り出すメディアが、どのように人と人、情報と場所を繋いでいるのか。地域に関わるメディアの機能とグローバルな展開の可能性を、次のアプローチを組み合わせたアクションリサーチによって明らかにした。(1)コミュニティ活動とメディア戦略に関する英米国での現地調査、(2)メディア実践（米国のコミュニティラジオ局の日本語番組制作、自主制作冊子出版）、(3)海外の地域メディアと日本の大学を繋ぐメディアワークを通じた多文化教育。本研究の成果は、学術論文、学会発表、ラジオ放送、Website、Zineなど、異なる媒体、方法で公開した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義は、以下の3点にまとめられる。(1)現地調査、メディア実践、学校教育という異なるアプローチを有機的に繋いだアクションリサーチを実施し、その方法論を提示した（学術的意義）。(2)米国のコミュニティラジオ局における日本語番組制作を通して、文化、社会的マイノリティが、地域メディアを利用してグローバルに発信し人と人、情報と場所を繋ぐ可能性を実証的に示した（社会的意義）。(3)日本の大学と海外のラジオ局をオンラインで繋ぎ番組を制作するメディアワークや日本の大学生のZine作品を海外で展示するなど、グローバルな地域連携と多文化教育の可能性を提示した（学術的・社会的意義）。

研究成果の概要（英文）：In multicultural societies, how can people create and use their own media for community activities, connect with others, and share information locally and globally? In order to answer this question, I have researched the function and possibilities of grassroots media through three approaches. (1) Fieldwork on community activities and their media strategies in the US and the UK. (2) Action research through my own media work: hosting a weekly Japanese language program from a community radio station in the US and publishing the Grassroots Media Zine series in English. (3) Active learning for media and research classes to learn DIY media and engage with a multi-cultural society through global collaboration. The outcomes of these studies have been disseminated in academic papers, via in-person presentations, and also shared on our broadcast, in zines, and on a website open to the public.

研究分野：文化人類学

キーワード：多文化社会 コミュニティ活動 メディア戦略 アクションリサーチ メディア実践 コミュニティラジオ Zine グローバリゼーション

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

人、モノ、情報のグローバル化が進むなか、多様な人々が集まり移動する都市空間において、どのように地域コミュニティが創出されるのか。この問題について、英国のロンドンにおいて、2001年より3つの調査研究を進め、住民活動とメディア戦略に注目するようになった。また、2010年より、米国のイリノイ州において、草の根運動とメディア利用についての調査を開始し、調査者自らが地域メディアを利用して現地社会と関わるメディア実践を通じた調査法を展開し本研究に至った。以下のような経緯である。

(1) 都市空間における地域コミュニティの創出とメディア戦略

2001年よりインナーロンドン西部のハマースミスにおいて1970年代に設立されたコミュニティセンターの現代の活動とその歴史についての現地調査を開始した。そこで、このセンターのモデルとなっていたのが、1960年代にノッティングヒル(ノースケンジントン)において行われてきた実験的なコミュニティ活動の一つであることを知った。これは、既存の地域コミュニティや住民組織がない貧困地区に自治組織を作り住民自らが生活を改善していくことを目指すものであった。

第1の調査の展開として、1960年代のノッティングヒルの多様な活動に関わった人々への聞き取り調査を始めた。当時、この地域は、ロンドンでも最貧困区であり、1958年の人種暴動後、様々な立場の活動家が集まり、それぞれの理念のもとで住民支援、地域作りのプロジェクトが行われていた。

第1の調査と並行して、同じハマースミスで、1990年代以降に転入したミドルクラスの住民たちが中心になって結成した住民組織についての調査を行った。ジェントリフィケーションが進んだこの地域において新しい住民たちは、落書き消し活動、植樹活動、地域における犯罪防止対策など、地域社会の質の向上と安全を高める活動を展開していった。

以上の3つの調査は、時代、対象が異なるが、いずれの活動においても“コミュニティ”がキーワードとして扱われ、60年代においても現代においても、住民がどのような媒体を利用し、情報を発信するかが活動を展開させる上で重要となっていた。現代においては、インターネットを利用して住民個人が大量の情報を送受信できるようになった。しかし、住民活動を展開するには、情報伝達だけでなく、地域において人と人が直接に出会い対面的な関係を作り出す「仕掛け」が必要となるという問題が見えてきた。これらの調査を通して、“コミュニティ”活動において、人と人を繋ぐ手段として住民たちが身近にあるメディアをどのように利用するのか、その「メディア戦略」に注目するようになった。

(2) アメリカの草の根運動とメディア

英国で1960年代のノッティングヒルにおける活動の聞き取り調査を通して、当時の英国におけるコミュニティ活動や対抗文化の活動が、1960年代の米国における社会運動から多くを学んでいることを知った。2010年9月より、米国、イリノイ大学に客員研究員として1年間在籍する機会を得て、米国における草の根活動とメディア戦略についての調査研究を開始した。2011年4月には、アーバナ・シャンペーン(隣接する2市)のコミュニティラジオ局ラジオ・フリー・アーバナ(以下、WRFUと記す)において米国と日本をオンラインで繋いだ日本語トーク番組を西川が主宰して開始した。こうしたメディア実践を通して、パブリックTVやコミュニティラジオなど、住民に開かれたメディア利用の背景には、メディアへのアクセスを「市民の権利」として主張し獲得してきた草の根運動があることを知った。英国での調査研究と、米国におけるメディア実践を通して、地域に根ざしかつグローバルに繋がるメディア利用の可能性を探る本研究の構想に至った。メディアテクノロジーが発達した現代においてこそ、コミュニケーション・ツールとしてのメディアの意味を、異なる時代、場所を対象とした実践的な調査を通して探求したいと考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、多様な人々が集まり移動する多文化社会におけるコミュニティ活動において、住民が作り出す小さなメディアが、どのように人と情報と場所を繋いでいるのか、その機能と可能性を3つの側面から探ることである。

(1) 英米国での現地調査を通して、1960年代と現代におけるコミュニティ活動とメディア戦略についての具体的な事例を提示する。

(2) 住民活動の現場で得た情報と方法を、調査者自らが地域メディアを利用して実践し、そこでどのようなメディア空間と社会関係が生み出されるのかを実証的に示す。

(3) 海外の地域メディアと大学の教育現場を接続し、授業におけるメディアワークを通してコミュニケーション・ツールとしてのメディア利用の可能性を示す。

3. 研究の方法

本研究の構成員は西川1名であるが、現地調査、メディア実践、大学教育においては、米国、

英国、日本の各地において様々な立場の人々からの協力を得て行われている。

(1)現地調査

2015年度から2018年度の4年間の研究期間において毎年、英国、ロンドンと、米国、イリノイ州、アーバナ・シャンペーンを中心に現地調査を行った。

英国、ロンドンでは、1960年代ノッティングヒルにおけるコミュニティ活動と対抗文化の活動に関わった人々へのインタビュー調査と当時の資料収集を中心に行った。また、ジン(Zine、少数部数の自主制作冊子)と呼ばれる紙媒体のメディアについて、これらを扱う書店、図書館、印刷スタジオ、関連イベントを訪ね、関係者へインタビューを行った。

米国、アーバナ・シャンペーンでは、NPOのメディア・アートセンターの活動、移民問題に関する住民組織の活動を参与観察した。またジンを扱う図書館、関係者への取材を、アーバナ・シャンペーン、シカゴ、セント・ルイス、ニューヨークなどで行った。

(2)メディア実践

米国のコミュニティラジオ局 WRFU において、米国と日本在住のスタッフと協働して毎週1時間の日本語番組を制作・放送・配信し、その記録を番組サイトに掲載して、地域メディアのグローバルな利用と展開の可能性を実践から探った。

英国での取材をまとめたジンを制作し英国と米国で頒布し、各地のジン・カルチャーについての調査を行った。

(3)大学教育におけるメディアワーク

米国の WRFU からの協力を得て、甲南大学文学部社会学科のメディア関連の授業において、教室とラジオ局スタジオをオンラインで繋いで日本語番組を制作し、地域メディアの仕組みとグローバルな繋がり可能性を実習から探求した。

甲南大学の社会調査関連の授業において、フィールドワークに基づくジン制作と展示講習会を実施し、学生が授業で制作した作品を英国、米国の書店、図書館、大学において展示することによって、ジンと地域の繋がり、教育への利用について関係者との情報交換を行った。

4. 研究成果

調査研究の3つのアプローチ(現地調査、メディア実践、学校教育)の成果を相互に関連させ、多文化社会におけるマスメディアとは異なる小さなメディアの機能と、人と人、情報と場所をグローバルに繋ぐ可能性を、具体的な事例を通して明らかにした。

(1)1960年代、ロンドンにおける対抗文化活動とアメリカ

英国での現地調査では、1960年代のロンドンにおける対抗文化活動の先駆者、ジョン・ホッピー・ホプキンス(1937-2015)へのインタビューと関係者への取材を、*Grassroots Media Zine No.3*(2016)にまとめた。ホプキンスは、ロンドン・フリー・スクール、地域コミュニティのニューズレターやアンダーグラウンド新聞の発行、音楽、詩、実験的なアートイベントなどに関わり、多様な分野の人々が出会い、新しいアイデアと活動を創出していく契機を作り出していった。彼の60年代の活動については、多くの文献で触れられてはいるが、ホプキンス自身の語りと活動を1冊にまとめた出版物は、*GMZ No.3*が最初である。また、ロンドン・フリー・スクールは、同時代の米国と英国の対抗文化の動きが、人と情報によっていかに繋がり影響していたかを知る貴重な事例でもある(雑誌論文)。

なお、1960年代のノッティングヒルのコミュニティ活動についての調査は、1960年代末に設立された、ノッティングヒル・プレスについての関係者への取材を継続して行っている。当時は、ニューズレター、ポスター、フライヤーなど紙媒体が住民活動にとっては重要なメディアであったが、この印刷所は、地域活動に携わる人々がより安価に印刷ができるよう20歳の若者2名が呼びかけ多くの個人と団体が協力して設立された。1970年代以降は、会社の名称や経営者、場所を変えながらも地域に開かれた印刷所としての役割が継承された。今日のロンドンにおいても同様の機能をもつ印刷所が複数あり、次に述べるジン制作にも利用されている。

(2)現代のジン・カルチャーの広がり

インターネットが普及し多様な情報が迅速に世界を駆け巡る時代に、英国、米国、近年では日本、インドなどアジア諸国においても、紙媒体の自主制作冊子、ジンをめぐる活動が盛んになっているのはなぜか。この問題については、自らがジンを制作、頒布することによって調査を展開することができた。ジンは、紙と文具、コピー機、あるいはパソコンとプリンターを使って簡単に制作でき、個人が表現し社会に伝えることができる身近な媒体である。また、作り手、読み手の垣根が低いことから、互いを触発し人と人を繋ぐ媒体でもある。英国、米国の一部の図書館は、現代社会における表現媒体としてのジンに注目し、地域のジンを収集、ジン制作のワークショップなどを実施していることなどを、カルチュラル・スタディーズ学会で発表し()、論文にまとめた()。英国、米国におけるジンをめぐる活動の関係者への取材は、Harukana Show Website にこれまで30あまりのレポートと、関係者へのインタビューも掲載している。

(3)大きな政治に抗する草の根運動と地域メディア

米国では、イリノイ州、アーバナ・シャンペーンにある NPO のメディア・アートセンターと移民問題を扱う住民組織の活動についての現地調査を行い、その一部は、現地の日本語ラジオ番組でもテーマとして扱い、Harukana Show website に詳細を掲載してきた。トランプ大統領の政権下において移民に対する厳しい政策が行われるなかで、調査地域の個人や団体、時には地方行政が連携して、大きな政治に対する抗議の声を上げてきた。アーバナ市の「聖域都市宣言」独立記念日のパレードにおける移民を歓迎し多文化共生を願う住民たちのデモストレーション、移民問題に関する住民組織が主催し地方行政や公共図書館も協賛して社会に貢献した移民を表彰する催し、などが行われた。こうした活動を支えてきた個人や団体は、日常においても地域メディア（コミュニティラジオ、パブリック TV）や SNS などを組み合わせて地域内外を繋ぐ情報ネットワークを作り、また、様々な立場の個人や団体が顔を合わせる機会を定期的に設け、その時々々の政治に対して機敏にアクションを起こすことができる仕組みを地道に作ってきた。現地調査とともに、地域メディアのスタッフとしての長年の取材を通して、米国の地方都市の草の根活動の動きを現場から学び伝え記録することができた。

(4)アメリカのコミュニティラジオ局からの日本語番組制作

本科研の海外学術調査は、8 月、9 月の米国、英国での現地調査を中心としているが、年間を通して、米国のコミュニティラジオ局 WRFU からの日本語番組 Harukana Show を、両国在住のスタッフと協力して制作してきた。2016 年からはストリーミングが開始され、WRFU からの生放送の番組配信を世界各地において聴くことが可能となった。本研究期間においては、第 210 回（2015 年 4 月 3 日）から第 419 回（2019 年 3 月 29 日）まで放送を重ね、番組サイトには編集音源と日本語説明、写真を掲載した。英語圏のコミュニティラジオ局において、8 年にわたる日本語プログラムの継続は、社会的、文化的マイノリティが、地域メディアを利用してグローバルに発信し、時空間を超えた緩やかな繋がりを形成しうることを示している。これをアクションリサーチの方法論としてまとめた論考が、図書 である。なお、Harukana Show は 2019 年 4 月以降も毎週、制作されている。

(5)多文化社会におけるメディア実践の授業

以上の現地調査とメディア実践の成果を、調査地の個人、団体からの国際的な協力を得て、甲南大学の授業に応用した。神戸にある大学の教室と米国のコミュニティラジオ局 WRFU をオンラインで繋ぎ番組を制作するメディア実践の授業では、学生、教職員が協働して、教室を臨時スタジオと視聴ルームに仕立て、試行錯誤を重ねながら、番組を制作・放送した。これらの試みは、「自分たちでメディアを作る」という貴重な体験であると同時に、教室という場所から海外と交流し、他者に伝えることを通して自文化を見つめ直す多文化教育である。甲南大学のメディア実践系授業におけるアクティブラーニングの試みは、日本文化人類学会で発表し（ ）論文、 に公開している。

(6)「参加型メディア」ジンをういた身近な他者へ伝える授業

「伝える」という行為は、常に、「他者」への発信である。大学教育においては、それぞれの専門分野において、論文や調査報告書に一定の形式とルールがある。これを学習した上で、その内容を、専門用語、形式に頼らず、調査協力者を含む第三者に伝えようとする時に改めて、調査とは何か、そこで生じる関係をどのように受けとめるのか、現場における学びをどのように他者に伝えるのかをより強く意識する。この授業では、受講生たちが、各自のフィールドワークの報告書を、形式自由なジン作品にまとめ、これを教室で展示する講評会を行った。手作りのジン作品は、作り手と読み手の垣根を超えた交流を生み出す。このことは、教室の中での展示・講評会とともに、英国、ロンドンのアート系書店で日本の大学生によるジン作品を展示した際にも実感した。また、ジンをういた授業の試みを、米国、イリノイ大学の都市研究、図書館学の授業で紹介するなど、米国、英国の大学、図書館関係者との情報交換を続けている。こうした授業作りについては、論文 にまとめた。

(7)現代社会におけるコミュニケーション・ツールとしての地域メディア

本調査研究が目撃してきた地域活動においては、様々な立場の個人が、身近なメディアを創造的に使い表現・発信し、人と人との関わりを作り、地域内外の活動を支えていた。現在のコミュニティラジオもジンも、情報を伝える手段であるだけでなく、メディアを使うという行為を通して、人々が自分や社会の問題を発見し、より多くの人々と関わる手段となっている。そうしたメディア表現者が地域の人と人を繋ぎその連鎖が、時には、地域における様々なアートイベントを盛り上げ、地域を超えた情報ネットワークを作り、より大きな政治に抗する地域の運動を支える力にもなっている。本研究を通して現場から学んだコミュニケーション・ツールとしての地域メディアの可能性については、米国の調査地の大学、高校の授業、地域で開催される関連イベントなどに参加し、様々な形でプレゼンテーションを行ってきた。そこでの情報交換を通して見えてきたのは、地域の公共図書館や NPO のメディア・センターなどが、「多様な人々と情報と場所を繋ぐ空間として、地域とどのように関わっていくか」という問題に対して、それぞれの組織が持つ従来の機能を変革しながら取り組んでいることである。草の根活動が育

んできた「メディアを利用して個人と個人の対話を生み出し重ね、その関係を社会に開いていく」というある種のエンパワーメントの方法が、地域図書館や大学といった公共機関の取り組みとどのように接続して展開していくのか。今後も、地域とメディアと教育に関わりながら、グローバルに調査研究を続けていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計6件)

西川麦子、「参加型メディア」Zine を取り入れたフィールドワークの授業：他者に伝えて学び合う、甲南大学紀要文学編、査読無、169、2019、63-77

DOI : 10.14990/00003260

西川麦子、「メディア実践系」授業の作り方(総論)：甲南大学文学部社会学科の取り組み、甲南大学紀要文学編、査読無、168、2018、95-104

DOI : 10.14990/00003019

松川恭子、辻野理花、西川麦子、「メディア実践系」授業の作り方(実践編)：他者から学び、伝える方法、甲南大学紀要文学編、査読無、168、2018、105-132

DOI : 10.14990/00003023

西川麦子、現代のコミュニケーション・ツールとしての ZINE：顔が見える他者を引き寄せるメディア、甲南大学紀要文学編、査読無、167、2017、51-66

DOI : 10.14990/00002349

Mugiko Nishikawa, "John 'Hoppy' Hopkins: Interviews from 2009-2014", *Grassroots Media Zine*, 査読無、2016、1-70

西川麦子、1960年代、ノッティングヒルにおけるロンドン・フリー・スクールのメディア戦略:John 'Hoppy' Hopkins の『ハプニング』の作り方、甲南大学紀要文学編、査読無、166、2016、87-104

DOI : 10.14990/00001798

〔学会発表〕(計2件)

西川麦子、他者に伝えて学ぶメディア実践の授業：教室を多文化接触のメディア空間にする、日本文化人類学会、2018年、弘前大学

小笠原博毅、西川麦子、立石尚史、諫山三武、En-Zine(Zineの輪)：反時代的対話醸成装置、カルチュラル・スタディーズ学会、2015年、関西学院大学大阪梅田キャンパス

〔図書〕(計1件)

工藤保則、寺岡伸悟、宮垣元編著『質的調査の方法：都市・文化・メディアの感じ方』第2版、法律文化社、2016、西川麦子「アクションリサーチの方法」144 - 155

〔その他〕

ホームページ等

①Harukana Show : <http://harukanashow.org/>

②Grassroots Media Zine: <http://grassrootsmediazine.org/>

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。